

ビオトープ・イタンキ通信 第8号

NPO法人 ビオトープ・イタンキ in 室蘭 2016年5月1日

NPO 法人 ビオトープ・イタンキ in 室蘭では「ホテル再び、人にやさしい街・室蘭」を合い言葉にビオトープ作りを進めています。原始のままの海岸線、鳴り砂の浜に続く草原の一角に、今は失われてしまった湿地を復元し、子供たちが生き物と触れ合える場の再生を目指しています。

◆春一番の清掃活動

昨夜からの雨はまだ続いている、どうしたものかと思ひながら現地に着いたら合羽姿が3、4人いた。眠りからさめ命あるものには恵みの雨である、愚痴など言えない。

やがて歩きながらふと思った、昔のゴミはどうだったのか終戦前後以前の話である、総じて全てが腐り翌年の肥料として大根、芋などに形を変えて胃袋を満たしてくれた。今は永遠に残る物質がゴミとなっている、一罰百戒ならぬ百罰一戒の心を込めてゴミを拾う。



4月3日の清掃活動(室蘭民放撮影)

負と空を見ると薄日が差してきた。前方の雪堆積場を見ると真っ黒い雪の中からプラゴミが無数光輝いている、なんとも人間の所行を感じた。

(牧口東生)

◆植樹活動のはじまり

4月、5月のビオトープの活動は、植樹が中心です。今年度は、4月17日(日)に実施。カシワ、エゾノコリンゴ、キハダの3種類を約40本ずつ8人の会員で植えました。

枯草に覆われた地面に剣先スコップの刃先を立てるとゴツンと石に突き当たります。場所を変えたり石をよけたりして掘った穴に、根を痛めぬように入れて、土をかけます。そして、ネズミにかじられぬよう、根元にペットボトルの上下を切ったものを、帯のように巻きます。

当日の9時から12時は、雨の合間でした。苗場から新しい土地に引っ越した100本程の苗木には、恵みの雨が降りました。

10年余り植樹してきた樹木は、3500本近くになるということです。種から育てられ2、3年から5年くらいたった苗木です。立派な木立になっている木々もありますが、ネズミに樹皮をすっかり齧られて犠牲になったり、潮風にたえられなかった木もたくさんあります。それでも、この日は、前年に植えたエゾノコリンゴの細い苗木たちが、もっと細い赤い枝を伸ばして新芽をつけている健気な姿を見つけて大いに励まされました。(渡邊英子)



植樹活動の様子